

平成 29 年度第 1 回神奈川県総合教育会議議事録

名 称：平成 29 年度第 1 回神奈川県総合教育会議
開 催 日 時：平成 29 年 5 月 30 日（火曜日） 午前 8 時 55 分から 9 時 58 分まで
開 催 場 所：県庁 新庁舎 5 階 第 5 会議室
出 席 者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、高橋勝教育委員会委員、倉橋泰
教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員、笠
原陽子教育委員会委員

次回開催予定日：秋頃予定

問 合 せ 先：所属、担当者名 政策局政策部総合政策課政策調整グループ 星野
電話番号 (045)210-3056（直通）
ファックス番号 (045)210-8819

経過：

1 開会

平井政策部長：開会にあたりまして、本会議を主催します黒岩知事からごあいさつをお願いします。

黒岩知事：本日は大変お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。始めに教育委員会委員につきましてこれまで多大なるご尽力いただきました具志堅委員が辞任されました。これに伴いましてこの度、笠原陽子委員を新たにお迎えいたしました。本日の総合教育会議は、この新しい体制で初めての開催となりますけれども、委員の皆様とこれまでと同様にこの場を通じて十分に意思疎通を図って、本県の教育行政を推進してまいりたいと思いますのでどうぞよろしく願いいたします。

さて昨年度のこの総合教育会議では、ともに生きる社会を推進する取組みのほか、人生 100 歳時代における学びの多様性などをテーマに議論を行いまして、様々なご意見をいただきました。人生 100 歳時代におきましては、学び直し、社会参加などの様々な論点がありますけれども、これらの基礎にあるものが、児童・生徒の生涯を見据えた教育、それを支える教員や学校でありまして、その役割は非常に重要なものであると考えております。本日は、こうした時代に対応する教育や学校のあり方について、委員の皆様から忌憚のないご意見を聞かせていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

2 議事

議題 1 かながわ教育大綱における主な取組みについて

平井政策部長：ここからの議事進行は、知事をお願いをいたします。

黒岩知事：吉田委員いかがでしょうか。

吉田委員：人生 100 歳時代の学校のあり方についていろいろな考え方があってと思います。僕が一番関心を持っているのは、やはり教員の多忙化解消という点です。それに関しまして、

ハードな面とソフトな面があります。ハード面は、いろいろな形で職員を入れたりとか、いろいろなサポートという点でしょうけれども、多少やはり予算的なこともある。そして多少時間もかかるのだ。じゃあ精神科医としていろいろな普段やっていることとして何かアイデアはないのかという点で考えれば、基本的に、例えば、会社でメンタルヘルスの考えると、縦軸に裁量権・自由度というものをとって、横軸に達成感・期待度というものをとるとします。そうすると、裁量権、自由度がなくて、そして期待度もなければ、本当に何もやりがいのない仕事。自由度、裁量権がなくて、期待、達成感、ノルマばかり多いと、非常にハードな部分。では、この裁量権・自由度があってそして達成感・期待度も両方満たされる部分というのは、一番やりがいのある部分の仕事だと思います。じゃあ、会社と比べて学校はどうなっているかという点、県立じゃないですけども、私学でいくつかの学校の産業医をやります。昨年度から、ストレスチェックというのをやって、一番普通の社会と比較して低いのが、周囲のサポートという点が学校関係というのは非常に低くなっている。考えてみれば、担任があって、そしていろいろな仕事をしていると、ある意味じゃ、1人でやっている。周りのサポートなんかあまり感じられない職場が多いのかなという点がある。もう一つ、僕、横浜市の教職員の休職・復職の判定委員をやったりもするのですが、一番多いのは、やはり自分1人で仕事を抱えてしまって、例えば、多少問題のある生徒さんなんかに対応してて、自分で何とかしなきゃ、自分の担任なのだから、自分の責任なのだから、というスタンスで常にやっていて、そして、場合によってはPTA・親御さんたちからもいろいろなクレームもあったり、それも全部自分で抱えて周囲のサポートがないような状態。それで、結果的には鬱々となって、休職に至っているというケースが結構ある。じゃあどう対応するのですかという点、やはりそこで、教頭であったり、校長であったり、ものすごく相談体制というのをきちんとすること、それが非常に大事。そういう判定をするときに、本人と家族とそして、先生、校長先生にも来てもらいます。今後、自分で今まで1人で抱え込んでしまって、いっぱいいっぱいになっていたのですが、それを何とかするためにこれから相談していきたいという思いでいるのですが、という発言を本人がなされ、そうすると僕の方から、校長先生・教頭先生に本人こう言ってますけど、組織として、そういった体制ができていますか、というふうに校長先生に聞きます。いやいやそれはまだまだですと言うと、学校の問題としてその先生は復職できないということもありえるぐらい。ですから本人が相談したい。そして、校長先生・教頭先生としては、相談しやすい体制を作ることによって、そして期待度、達成感というものをもっと上げて、そして働きやすい職場というのを作っていくというのは、まず、現実問題として多忙化を解消する、物理的にすぐ明日からやれることはなかなかないのですけれども、そういうソフトの面から働く職場の雰囲気として、そういったことを確立することからスタートして、そしておいおいスクールカウンセラーであったり、あるいは事務的な仕事をお願いするという点を充実させていくというのは、一番効率がいいのかなと思うところです。特に病院でも、医師、看護師の仕事が多かった。非常に多忙であった。それよりももっと患者さんのところに行って話を聞いていろいろなことをやってあげようというところで、我々が導入したのは、病棟クラーク。病棟にそれぞれ事務職を配置したというのは実績がある。生命保険の診断書の内容であったり、いろいろな証明書であったり、そういったことの時間を、医師・看護師が使わないでいいように、病棟クラークが代わり

にやってくることによって、さらに、その辺のところの充実を図ったという実績もあるので、僕はこれからそういう部分の、スクールカウンセラー、あるいは学校の事務職の担当をしてくる人というのもこれから充実させていくという順番でいけば、ある意味で、教員がさらにやりがいがあって、そして結果的には子ども達の教育にもっと熱心になって、そして素晴らしい部分に広がっていくのかな、そのような印象を持っています。

知事：教職員のそういう置かれた立場は、非常に難しい部分があるのでしょうか。これは教育の現場を何よりよくご存知な笠原委員いかがですか。

笠原委員：少し大きなくくりからお話させていただいてもよろしいですか。今回、人生 100 歳時代における学校のあり方というこのテーマを見たときに、人生 100 歳というこの言葉にもものすごくインパクトを感じました。と同時に、やはり教育がこれから非常に幅広に考えていかなければいけないのだと改めて感じました。なぜかという、今、文部科学省中心に教育改革が進んでいるのですが、そういう会議で、文部科学省から説明を受けるときに、今の教育改革は、20 年から 30 年後を見据えていると、よくおっしゃいます。その時のキーワードは I T 化であるとか、情報化であるとか、少子高齢化であるとか、が出てくるのです。それをベースに 100 歳と考えたときに、いや、そういう問題だけじゃなくて、もっと地球規模の自然破壊だとか、環境問題だとか、ものすごく大きな課題に直面していくことが、多くの人たちに求められてくるのだというそういう現実が 100 歳という中にはあるということに改めて気付きました。私自身がいた学校という場は、地域という場は、今までの概念では多分とらえられないだろうと。その枠からもっとはみ出てもっと自由にもっとある意味大胆に考えていただかなければ対応できない。そういう実感を持ちました。では、学校はどうあったらいいかという、学校は地域にとっては、ものすごく中心的な立場になる。でも、孤立化してはいけないのです。同時に地域にとっては、その学校という場が地域に住む人たちにとって、様々な財を提供してくれる場でないといけない。だから、学校の中にいる教員と、そして地域や保護者の方々が繋がって、一つの社会を築いていくという、そういう視点がものすごく大事になると。それはなぜかという、実は今、大学で、学生たちと一緒にこれからの学校はどうあったらいいかということ議論しているところです。その中でマサチューセッツ工科大学のピーター・センゲという人の考え方ですが、今までの学校は教える学校だったけれども、これからは、地域、学校、その中の大人であるとか保護者であるとかと、それらが一緒に学習する組織に変わっていかねばいけないのだということを強く説いています。それはどういうことなのかと考えたときに、少し別の視点からですが、今年度の P I S A (OECD 生徒の学習到達度調査) の学力到達度調査の中で、今までは学力の基礎だとか基本だとかということでの結果が出たのですけれども、今年度、ウェルビーイング (身体的・精神的及び社会的に良好な状態) という視点から、子ども達の健やかさ、幸福度という視点から結果分析が行われたのです。つまり、子ども達が大人になって、自分たちで生きて働く、そして生活するという中で、健やかであるか幸福であるかという、そういうところに、学校教育も含めて到達していかなければいけないのではないかと。そう考えたときに、それを支える先生方自身がウェルビーイングであるためには、先ほど吉田委員がおっしゃったように、や

はり、学校の今、目の前にある多忙化とかは、絶対に改善していかなければいけないので。大学に来る現職の方々も本当に日々忙しい。そこでただ、多忙化を解消すればいいのかということではなくて、その多忙化の先にじゃあどういいう学校というのを描いていったらいいのかと考えたときに、お互いが支え合う、教育の中だと同僚性という言葉があるのですけど仲間同士が対話をして、そして、子ども達にとってより良い学習活動が展開できる。そこを目指して、多忙化を解消していくことが必要だろうと。だからこそ、今教育委員会で進めているような、学校へのサポートはものすごく大事であって、そこは、実現をしていかなければいけないという感触は非常に強く持っています。少しまとまらない話で恐縮です。

倉橋委員：人生 100 歳時代における学校のあり方と、それを支える教員の多忙化解消の問題について意見交換しているのですが、私、すごい違和感があって、100 歳時代を考えると、今現在多忙化していることは全く別の話であって、その議論は一緒にすべきではないと思うのですね。まず言うと、人生 100 歳時代における学校のあり方を考えていくときには、10 年後、20 年後、30 年後世の中がどうなっていくのか。それに対して教育はどうあるべきかという議論をしなくてはいけないと思うのですね。最近になって AI がすごく進んできて、ごめんなさい、私すぐ忘れちゃうのですがアメリカの女性教授がおっしゃってましたけど今小学校入った子が大学を卒業する時には 65% でしたかね、現在ない仕事についているということをおっしゃっています。ある意味で言えば、20 年、30 年前はスマートフォンがなかったのですから、スマートフォンの技術に関する技術者というのは全くなかった職についているわけですからね。そういうことは全くありうるわけですよ。特に言うと今 AI の技術で、自分で学ぶ技術というものが発達してくると、まず 10 年後、20 年後に運転手はいらないのじゃないか。全部自動運転になっちゃう。自動運転になって便利になると、車を買わなくなっちゃう。そんな世界になる。それから今、英語を一生懸命勉強しているけれど、その通訳の機械が発達すると覚えなくてもいいのかもしれない。英語は話せなくてもいい世の中になっちゃうかもしれない。ただ通訳するだけではなくて、英語を話す人の考え方で物事を考えるということは大事なので、やらなくていいというわけじゃないですけど。そういうことを踏まえたときに、どんなふうにしていかなきゃいけないのか。特にそういうことで言うと先生が先に学ばなければ、生徒を教えられないので、そういう世界をどう作っていくかという議論をすべきなのじゃないのかなと思います。それと、今現在、支えている教員の多忙化というのは全く違う問題であって、これについては現状打破にどういう手立てを打つかということだと思うのですね。教員 1 人 1 台パソコンは未整備で、整備率は 77.8% であると聞いています。これは、どうなのかなと。今大学を出た先生というのは、パソコンを使いまくっていると思うのですね、レポート一つ出すにしても、いろいろなソフトウェアを使わないと出せないような状態になっている。今で言うともうスマートフォンが、去年、日本で 6,000 万台出ていますから、スマートフォンはコンピューターと一緒にですから。スマートフォンを持っていると簡単に手元で資料を引けちゃうのですね。それとラインなんか 10 人、20 人で、サークルを組めますから、そこで情報交換はすぐできる。今、うるさいこと言うので、パソコンをインターネットにつなぐと外部からの漏えいがどうのこうのという話になりますけど、ラ

インなんかでやると、自分と先生方の情報交換は即座に出来てしまいますね。だからいろいろなセキュリティの問題、難しいことがあるので、少し迂闊なことは言えないのですけど、どんどん先生方もパソコン持ってきていると思うのですよね。そんな中からやれるところから改革をやらないと、それも将来に向けて、パソコンのスキルは絶対ですから、そういうところから見ていかなければいけないのじゃないのかと。それから、サポーターを入れる話なのですけれども、サポーターを入れることはいいと思うのですがそれよりも、民間でよくやるのですけれども、忙しくなるとですね。結局これいけないことなのですけど、仕事入れちゃうとどうなるかという、やらなくていいことはやらなくなっちゃうのです。プライオリティの高いものからやっていくので。結局は効率が上がるのですね。ただ、残業はマックスになってしまいますけれども、会社的には良くなっちゃうのですね。そういったときにどういうことをやるかという、今、吉田委員が達成感・自由度を横軸にしてという話ですけど、私たちのやり方というのは重要度、この仕事は本当に大事なかな。重要度を縦軸にとって、横軸は時間ですね。その仕事をするのにどのぐらい時間がかかるのかというので、今やっている仕事を見える化していくのですね。それで、重要度の低いものは、どんどんやらないことを決めるのですね。だからよく言うのは、上司からこの仕事やっておいてねと言われて、わかりました。何でもエージェントという、前に私が勤めていた会社では何でも急ぎという先輩がいて、徹夜してやっておくと、机の上で10日間くらいほったらかしになっているのですね。急ぎと言ったじゃないですかという話ですね。あのときは急ぎだったのだとか。そういうことを何度かがんがんにやられて、僕は、その先輩に、ほんとに重要ですか。何のためにやるのですか、と何回も聞くようになると仕事が回って来なくなりました。さして重要でない仕事が私に回ってきていたので。重要なことを自分でやっていると思うのですね。だから、そういうことはあるから、報告しなさい、報告しなさいと言っている側から見るとそれは本当に、集めているだけの仕事が多くないですか。作ったもの、誰も見ない。でも作らなきゃいけないから作っておくと。そういう仕事はバツバツ切っていくと。もうやらなきゃいけないことはいっぱいあるのですね。うちなんかそうですね。内勤の人たちというのは仕事を自分で作るのですよ。ここもやっておかなくちゃとか、時間が余るとね。これも勉強したいからやっておこうと。悪いことではないのですけど、そういうことを、そのまま重要な仕事と同レベルでやっちゃうと、後ろ向きにひっくり返っちゃうのです。だから、縦軸・横軸であって重要度があって時間もかかるものだけやらないと困るから。これは、スケジュールを組んできっちりやる。重要な問題であるから時間がかかるから。これ忙しくて手がつかないと言うと、本当に手がつかなくなっちゃうのですよ。だから、これだけはきっちり見つめて、重要度の低いやつはとる。重要なだけけど時間のあるものは、スケジュール感で先にやっていく。時間かかるものは、定期的に必ず入れていくという形で、整理することからやらないとだめだと思います。なんかぐちゃぐちゃいっぱい言っちゃいましたけど、そんなふうに感じています。

黒岩知事：議論に入る前に事務局から説明があるのですよね。状況から説明をお願いします。

○ 杉山総合政策課長より資料を説明。

河野委員：まず人生 100 歳時代における学校のあり方というテーマそのものは、すべての構造改革の中での学校のあり方を表しているとは思っています。教育委員会だけの学校ということから、世界のというか、地域のというか、地域という言葉が広いのか狭いのか表現としては別なのですけども、本当に全県で考えていく課題なのだなと改めて感じました。その上でなののですけども、私がキャリアについて 30 年近く民間企業等に仕事をしていることを踏まえて話させてください。100 歳時代の生き方は前回もいろいろなお話が出てきましたけども、児童・生徒に 100 歳まで生きていくことの広い意味でのキャリアビジョン、人生設計という意味ですが、それに向けたキャリアプラン・ライフプランを考えさせることが非常に重要だと思うのです。ここ一つとっても、学校の先生にすべてというのは難しいのかなと思ひまして、もちろん、主導的に指導していく中で、民間の人達をうまく活用していくということも考えられるのではないかと思います。切り口を変えて、児童・生徒側ではなく、社会人側として考えた場合、60 歳以降を考えても 40 歳もあるわけですね。生涯を通した活動という点から考えると、学校と接点を持てるというのは本当にうれしいことだと思います。ただその中でも、ボランティアとしてできる人と、有償ボランティアならやりたいなという人もいるでしょうし、専門分野のランクもあって、お手伝い程度でという人と、資格をとってがんばろうという人とがいると思う。そこも、多様性だと思うのです。とにかく 50 代から 100 歳まで人生半分ある人達と学校との関係というのをうまく使いながら、学校の経営に生かしていけたらなと、社会人側から見て、思っていました。特にその中で、今日もテレビで、偶然やっていたけど、可能性を感じるのが部活なのですね。私は民間企業の採用の面接等のアドバイザーもしているのですけれども、もちろん部活がすべてではないですが、そこでの経験というのは非常に大きく社会で生きてくるので、面接では大切にしています。その部活動が危機だとすると、学校の先生以外の方々をいかに上手く、活かすというのは失礼な言い方で、サポートしていただくかという仕組みづくり、これ予算もかかることだと思うのですけども、そこを構築していくということも大切だと思います。先ほどから職員の多忙化、先生たちの多忙化が話題になっていますが、これから人を育てるのに 100 歳まで育てるのに、そのプロセスの中で必要なものは残して、ただ残すときに全部先生でなく、違う仕組みを検討することが重要だと思います。それは正に学校のイノベーション、県のイノベーションだと思うのですが、そういう人材のありようというのを、少し大きい話で恐縮なのですが、考えていく時代に入ってきたのではないかと考えました。

高橋委員：二つの観点からお話します。一つは、今お話が出ている教員の多忙化であります。もう一つは、学校をこれからどうやって作っていくかというときに、やはり私は地域社会、あるいは地域の文化的な創造とつなげて考えるべきだろうということ。その二つの話をしたいと思います。まず前半の教員の多忙化ですけど、もうこれは新聞報道で、既に、いろいろ言われてきました。2013 年の調査で、国際教員指導環境調査、いわゆる、TALIS と言われていますが、先進国 34 か国・地域が参加しましたが、その結果で、日本の教員、これは中学校の教員だけですが、日本の教員が一番多忙だった。仕事時間が 1 週間に平均 53.9 時間で、各国の平均は 38.3 時間ですね。その多忙化の大きな要因の一つは、

今、河野委員からも出ていました課外活動の時間ですね、日本は週に7.7時間。ほかの国は2.1時間しかない。これが一つです。もう一つの多忙化の要因は、一般的事務業務に使った時間、事務的な仕事が、日本が週に5.5時間に対してほかの平均は2.9時間ですね、約半分だったということです。つまり課外活動で、日本の中学の教員は、時間を沢山使い、事務的な仕事も背負っているということが、国際比較のデータから言えるのではないかと思います。授業時間や、その準備時間は、あまり差はない。私が問題にしたいのはそれだけではなくて日本の教員の自己効力感。つまり、達成感とか、やったぞ、いい授業したぞみたいな充実感、それがほかの国と比べて低いのです。先ほど、笠原委員からも、PISAの話が出ました。15歳、高校1年生の学習到達度調査。日本は、2000年から始めて、3年ごとにいつも上位グループです。これはリテラシー、言語力であれ、理数系であれ、アメリカはだいたい平均なのですね。しかしですね、例えば、生徒に勉強ができる自信を持たせるということに対して自信を持っているという教師が、日本は17.6%、国際平均85%ですよ。それからですね、生徒に学習の価値を見出せるような手助けをしている。つまり、勉強が大事なのだということ、思うようにさせているという自信がある教師が、日本は26%、国際平均80%。それからですね、これは日本が最も弱いところですが、生徒の批判的思考、クリティカルシンキングを教えているが、日本は15%、国際的には80%。つまり、日本の先生方は、多忙なだけではなくて、あれだけ仕事をし、しかも授業の準備もし、一生懸命やっている割にはですね。達成感が低い。これは生徒も同じです。生徒もPISA調査では、学力はいつも上位グループです。だけれども、自尊感情とか、さあこれから何かやっていくぞという自信に関する調査は、これは低い。先ほど笠原委員がウェルビーイングの話をされましたが、生徒に関して言うと、学力は高いが、自信がない。先生方は一生懸命やってはいるのに、自信がない。私は、これはやはり大きな問題だと思うのです。その主な原因は二つあって、一つは、やはり分業体制がきちんと進んでいない。欧米はですね、教員は専門、日本もそうですけど、基本的に専門職で専門家です。専門家とそれをサポートするスタッフは、はっきり分かれています。それぞれ、教師、事務職員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、いろいろな人が分業体制で教師を支えていくという体制ですね、教員以外のスタッフの数は、データがありますが、欧米の方がはるかに多いのです。そういう問題になってくる。ですので、私は神奈川県もこれからは、先生が、授業や生徒一人ひとりに専念できるように、そういう体制を作るべきだと思います。先程来話が出ている部活動を、これはやはり民間と言いましょか、地域のスポーツ団体の指導者とかそういう方々に、いろいろな形で、連携を取りながら委託していくという方向が考えられる。

もう一つですね。大事なことを申し上げたいのですが、それは、これからの学校づくりですけど、多忙化解消ということから少し離れますが、これからの、いわゆる成熟社会の教育のあり方を私はいつも考えています。成熟社会というのは、いわば近代化が終わり貧しい時代が終わって、知事がおっしゃる人生100歳時代、あるいはエコロジカルな時代、あるいは人間が自己実現を求めながら生きていく時代。つまり、食べていだけじゃなくてですね、自分らしく生きたいとか、そういう自己効力感を求める時代。それがなかなか日本では、達成できていないという実感を皆さん方もお持ちのことだと思います。一生懸命働いている割には、幸せ感が薄いことが、私は気になっています。それはですね、やはり

文化的な問題。つまり、欧米の先生方は、自分は生徒たちに対してしっかり勉強に励むように教えていますよといますが、特にキリスト教圏の教育は、人格の中身に入らないので、自分がやれる範囲でベストを尽くせばそれでいいという文化がある。しかし日本はですね、母性原理で、その子の心の中までしっかり本気でやる気にならないと教えたと思わないところがあります。無限責任を先生方は、背負いがちであります。私はもう少し気を楽しんでいるんじゃないかなと思います。もっと言うと、今日も、先ほど事務方の説明で、何々を育てる、とあります。これは文部科学省からこの学校も育てるという言い方が多いのですが、私は、何々が育つ、つまり、子どもが学ぶとか、子どもが育つとか、学び合うとかですね。子ども中心の自動詞で進めていけばいいのだけど、日本はどうしてもしっかり指導する、きちんと教えるということになります。先生が能動的になって、生徒は受身で口を開けて待っている状態がずっと続いてきました。しかし、成熟社会では、生徒が口を開けて待っているのじゃなくて、自分で欲しいものを探すように仕向けるという時代になっていく。先生方はもっと背後に引いていい。授業でも、生徒指導でももっと引いていい。自分たちの仕事をもっと制限、限定して行ってですね。それで、生徒が自分たちで何とかやっていけるように、そこに、地域の方々がいろいろな指導者であれ、スポーツであれ、いろいろな方々が学校に参加して、一緒に作っていく時代になったのではないかと思います。

桐谷教育長：人生 100 歳時代の学校のあり方という、近い将来から遠い将来を見たとき、今の時代の中で考えれば、これから、人口が減少し、資源は縮小していくだろうと。そのときに、学校というのは、地域におけるコミュニティの核になりうる存在。それだけ地域の期待もあるだろうと。ですから最終的に、学校というのは、地域に貢献し、また地域に支えられる。そうした資源としてとらえるべき。そこに至る道筋をどう作っていくかといったとき、やはり一つには、これまで学校のことは、学校でという、学校の文化ですとか、そういったものを変えて、逆に地域の人材、専門の人材、そういったものが学校の中に入ってくる、そういう形で進めていくことが必要なのだろうと。それが、とりもなおさず多忙化の解消。教員がすべてではなくて、スクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカー、あるいは様々な専門人材。そういった方を活用しつつ、学校のあり方を変えていくことによって、最終的に、地域コミュニティの核になるだけの活力を持った学校にしていくことができるのだろうと。それが、今のところから、人生 100 歳時代を見たときの学校のありようになるし、そこに至る道筋の中で、多忙化は解消をしていかなければいけない、そんなふうに思っています。

黒岩知事：様々ご意見ありがとうございました。何かもう論点がかなり明確に浮かび上がってきている気がしました。教員の多忙化、その背景と、それをどうするかという中で、少しこの中で改めて議論をしていただきたいのですが、先ほど倉橋委員の意見もありましたけれども、働き方そのものを変えていくという可能性がまだまだあるのではないかと。民間会社でいったら、忙しいときに、もっと忙しくなれば、逆に整理したら無駄な仕事をしなくなるという、逆説的な。学校の教員というのは、そういったことによってそういう仕事の整理ができるのかどうか。それとかまた、意識の問題。今の、高橋委員の

話がありましたけれども、あまりにも全部を引き受けなければいけないという、思い込み
というか、責任感はあまりにも強すぎると思うみたいな。そういう意識を変えることによ
ってある程度できる部分があるのか。それからなんらかのこのシステムそのものを変え
ていくと、その中で、地域という話と結びついていくのですけど。地域人材をいかに巻き
込んでいくかという中で、そういうことができるのかどうか。そういうことあたりがふわ
っと見えてきてるという気がするのですけど、これでいかがでしょうかね。さらにいかが
ですか。

笠原委員：全部繋がってくるのだらうなと今お話を伺っていて思ったのですけど。先ほどの
話で、大学の講義の中で、例えば学校の中に、ソフトもハードも全部ある程度整った条件
で先生たちはどういう教育活動をしますかと聞くと、ものすごく創造的で、こういうこと
をやりたい、ああいうことをやりたいと言います。ですから本当に先生方が学校教育を充
実させたいという思いも強く持っていて、だけど現実問題、先ほどから言っている様々な
業務のところがあってできないという状況にあるというのはすごく感じていますね。シ
ステムの問題であり意識の問題であると同時に、学校だけでできないのですね。だから地
域と一緒にやっていくことが求められます。その時、自分に何ができるか、自分に
できることをやるという、そういう発想を持っていただくことが大切です。先生方も、何
から何までやらなくてはいけないというのではなくて、自分に何ができるか。学校の中で
必ず何かできることがあるわけです。そういった視点で、校長が組織を動かしていくとい
う発想が求められます。学校組織は、任される人は任されていて、忙しい人は、本当に忙
しいのだけれども、どうしても効率を求めていく、ある一定の時間の中でなければいけな
いということを手を仕事ができる人に行ってしまうということになるのでしょうかけれど
も、やはりその人にしかないものを持っている先生方は沢山いらっしゃるもので、良さを
生かしながら同時に先生方の意識も変えていかなければいけないと思います。県の教育
委員会がやろうとしているコミュニティスクールという中で、動かしていこうという発
想になっているのだと思いますので。今後は、学校だけで考えるのではなく、地域にも、
情報を上手に発信してともに作っていくという発想が不可欠だと思っています。

高橋委員：地域の方々や保護者のお母さんたちが学校へ行って、小学校1年生、2年生に対
して、読み聞かせをしたりですね。あるいは地域の読み聞かせ活動をしている方々が学校
に行ったりですね。それぞれ得意な分野を皆さん、いっぱい持っているのですね。
私がいつも思うのは、特に教育行政で大事なものは、点在するものをつなげていく。点が互
いに意思疎通ができるようにつなぎ、滑らかにしていくことがとても大事だと思うので
ですね。いわゆる地域人材バンクもそうですけど、いろいろな宝物があるのに、それが何か、
バラバラになってしまっている。もう一つはですね、私は、生涯学習で一番大事なことは、
インタージェネレーション（世代間交流）、つまり、子どもが高齢者と出会う。あるいは、
中学生がこの前も話し合いましたね、赤ちゃんを抱っこする。そういういろいろな世代が
出会える場所として、学校を考えたい。従来は、学校は、児童・生徒という同一世代の枠
の中でしか教えていなかった。私は、学校がいろいろなジェネレーションの出会いの場、
ちょうど人間の血液のようにですね、体全体を巡るような、そういう場所として学校を作

り変えていく必要があるのではないかと考えています。

河野委員：今の話が続けて、私はいろいろなところにマネジメントの概念が必要ではないかと思っています。それもコミュニティスクールを神奈川版として推進する中で、みんながマネジメントをするという概念を共有できるのではないかと考えていました。例えば先ほど知事がおっしゃっていた、今ある仕事をスクラップアンドビルドして、もっと仕事を減らすための解決策や、仕事そのものが必要かどうかを判断するためのマネジメント。同時に、人材を投与しなければ無理だということも、マネジメントでしょうから。その発想というか、考え方みたいなものが、今まで、学校教育にはあまり必要なかったのではないかと思うのです。ですけどこれからはそういうことも意識する。そうすると、この仕事はいろいろなじゃないか、かえってやらない方がいいのじゃないかとか、そういう発想も必要で、そういう発想を外から入れようとするコミュニティスクールはすごく有用なのじゃないかと思はるのですけど。皆さんの意見を聞いてみたいです。

吉田委員：コミュニティスクールも非常に大事なことだと思います。教育委員になって倉橋委員から非常にいい勉強をさせられた覚えがあるのは、昔は、この仕事取ってこい、取ってくるまで帰ってくるなどと言われた。11、12時まで帰ってくるなどと言われた時代、根性根性で行って来いと言われた時代、それが今はきちんとしたセールストークをして、5時半に帰って来られるような教育をしなきゃいけないのだと。非常に目からうろこの思いがあったのですけど、そういう言葉は、まず教員にも表れているのじゃないかと。あるいは欧米と比較して授業時間にはそれほどのエネルギーを使っていないのだと。部活、事務職、いろいろなことをやってその時間でオーバーになっているのだ、これに関して自分だけで裁量しようとしても、やはりなかなか限界がある。それは周囲のサポート、校長、教頭、周囲のサポートによっていろいろなことやっていると、隣からそんなに今時間かけなくていいのじゃないのかとかというそういうコミュニケーションがその場であることによって非常にありがたいと思うし、そして何度でも言う、達成感というものは味わうためには、誰だって山登りきついよね。頂上に残ったときの達成感があるから、あの過程は耐えられるのであって。そういったものが、周りのサポートとして、ちゃんとわかってくれる。ですから、ある意味でコミュニティスクールなんかをやると、周りの先生もそうだし、地域の人たちが先生すごいね、頑張ってくれてこんなになったのだねという意味での声かけなんかがあるとさらに、その達成感というものを作ってくれるのじゃないかなということは思います。それともう一つ、いろいろな事件があったりして例えば、ある病院で点滴の異物混入とかああいう事件がありましたよね、あれだって、まず孤立させないことがキーワードだと思っている。いろいろな困ったこと悩んでいることを1人でやって、仮に行政の方にいろいろSOSを出したのだけど何もかまってくれなかった。結果的にはそのストレスがああいう方向に向いてしまったという現状があるので。何か困っていること、いろいろなことがあったときに、やはりそこでお互いにコミュニケーションを取ってサポートして、孤立させないようにというような、そういったような感覚。それすなわちいろいろな意味に役立っていくのかなと思うので。これはお金をかけないですぐにでもできることなので、早速取り組んでいって欲しいなという形で思います。

倉橋委員：100年ということで見ると、先ほどA Iのことを申し上げましたけど、これから革命が起こってくるのですけど、ディープラーニングという形で、機械が学習していつてということなので、例えばですね、今すごくヒットしているのは、受験生用のスマートフォンで、授業が見られるのです。それはやはり、教え方が素晴らしいから結構皆買うわけで。例えば1万人の先生方みんなそのレベルが保てるから、レベルが上がるように頑張れということじゃなくて、将来の世の中を見るとそれはどういうイントネーションでやった方がいいのかということ。ディープラーニングが始まってA Iがやってくると教え方というのは、均一化した、それはいいとは言いませんよ、そういう形になるから、教職員のあり方でこれからどうなるかということも考えて、動かなきゃいけないのじゃないか。授業に時間を割くことはすごく大事だし、今の時点では絶対それが大事なのですけど、それにサポーターがついて、生徒一人ひとりがわかるようにするのですけど、かたやこれは国の問題だと思いますけど。A I技術を持って、教職員の仕事を減らすと劇的に減るので、いいか悪いかの検証はまだこれからですけど、そういうこともやると、先生方はどんな世の中になっていかなきゃいけないのかなという。それと、英語教育なんかでも、1都9県教育委員会全委員協議会も行きましたけど、私なんか遅いと思うのですね。英語教育、これから小学校からやるのだけれど、3歳・4歳からやらないと。頭脳で言葉を覚えるというのはその年なので。だから、英語も英語と言いますが、日本語も日本語、国語なので。そういうコミュニケーションツールとしての英語と、それから、学問としての英語というのを分けて考えないといけないので、今、日本でコミュニケーションツールとしてできていない。それをどうするかという問題なので、今の現場何処理しようかということじゃなくてもう少し長い目で見た視点というのが忙しさのあまり、欠けてきてるのじゃないかな。それは国がやることであって、県がやることではないとか、何かそういうのがあって本来だったら、もっと、日本の教育、これからの世の中に合う教育とは何だろうということ、本当にディスカッションする時間をとるべきなのじゃないかなと思います。

黒岩知事：そろそろ時間も迫って参りました。桐谷教育長に全体の話をもとめていただきたいと思います。

桐谷教育長：一つには、学校の教員の多忙化の解消の一つの方向としては、やはり組織的に対応していく。教育そのものというのが教員と教材と生徒がいれば、その関係で成り立ちますけれども、やはりそうではなくて、組織的にあらゆる事象に対応していく、そういった学校をつくっていくことが必要だろうと。それがとりもなおさず、地域に支えられ、地域に貢献する活力ある学校を作る。多忙化の解消とも相まって、そこへ行く道筋なのだろうかと思っております。基本的にこのかながわ教育大綱における主な取組みで書かれている内容も、コミュニティスクールを中心にして、ハイスクール人材バンクですとか、スクールソーシャルワーカーの活用ですとか、やはりその方向を目指してもう一度知事と議論させていただいて、ご確認いただきたいと思いますので、引き続きその整理に沿って対応をしていきたいと思っております。

黒岩知事：ありがとうございます。今日、非常に有意義な議論ができたなと思っております。何かいろいろなヒントになるようなキーワードがいっぱい出てきたなと思ってます。皆さんの認識は割りと共通なところがある。学校というのを今までの従来型の学校という枠でとらえる時代じゃなくなっているのじゃないか、文部科学省があってその中の学校というものを考えていくという、学校のあり方が少し変わって、地域の中における学校、存在というのは要するに何なのか。それを地域の中の学校にしていくためには、何が必要なのか、どんな壁があるのか、今日は、そこはあまり突っ込んで議論できませんでしたが、それが次の課題かなという感じがしました。そういう問題意識は前からあって、コミュニティスクールといったものもやっていこうとしているわけですけど、コミュニティスクールを実際やっているところが実際にどんな形になっているのか、本当に地域の中の新しい姿の学校になりつつあるのかなのかといった現状を少し知ってみたいという、そんな気持ちにもなりましたね。

それと、達成感がないという。私は、これは、実は一番大きな問題のような気がしましたね。人間なんか、自分で今までやってきたことの中でも、どんなに忙しくても、何かやったという感じがあると、疲れも吹っ飛ばすというか、そういうところがあると思うのだけど。忙しくてくたびれただけで達成感がないというのは、最悪の状態というか。このところを中心にもっと掘り下げていく必要があるのかな。達成感とはどうやって出てくるのかなというのが例えば、実は、大したことなくなくて、先生ありがとうという言葉だけで達成感は生まれてくるのかもしれない。というそんなこともあるのかもしれないけど、システムとしても何かあるかもしれないです。この辺りやはり少し追求していきたい大きな課題かなと思いましたね、いろいろなものがあるけれども、何かバラバラで繋がっていないとかね。つなげていくという新たなものを一から作り出すのじゃなくてあるものをうまくつなげていくということによって実は解決策が出てくるのではないかなという、そんなこともある。今日はですね、様々な考えさせられる非常にいいキーワードがいっぱい出てきておりますので、これをまた整理して次の議論に続けていきたいと思っております。今日はありがとうございます。

議題3 その他

桐谷教育長：3点ほど知事へ報告させていただきます。一つは、前回の総合教育会議の中でも、共生社会づくりというお話が出ました。インクルーシブ教育のパイロット校、県立高校3校を指定して、茅ヶ崎高校、厚木西高校、足柄高校で、合計31名の生徒が入りました。ちょうど4月から5月に私、現場を回ってきまして、校長先生からお話を伺ってきました。子ども達は非常に元気に通って、部活動をやっている子もいます。非常に元気にスムーズに溶けこんでいると。校長のお話で一つ印象に残ったのは、構えていたのは、教員たち。在校生も含めて、子ども達は、すんなりと受け入れて一緒に勉強をしている、そういう言葉がございました。また保護者会も開催しております、好意的なお話をいただいております。引き続きパイロット校ということですので、しっかりと取り組んでいきたいと思っております。

それからあともう1点、インフルエンザに罹患した子どもの高校入試の関係で、4月の

教育委員会臨時会を開催しまして、来年度の県立高校の入学選抜で、本検査は2月14日なのですが、そこから中5日あけて、2月20日に追検査ということで、実施をいたします。詳細につきましては6月下旬までにまとめていきたいと考えています。

それからもう1点は、東日本大震災に関わるいじめの問題ですけれども、2月に、私と、県内の33市町村教育長で、いじめ防止対策を推進するための申し合わせを行いまして、それに則って教員研修ですとか、また学校現場での取組みですとか、様々な取組みを今進めております。またまとめ次第ご報告をさせていただきます。

平井政策部長：次回の会議でございますけれども、秋頃を予定してございます。詳細な日程につきましては、またご案内します。以上をもちまして、平成29年度第1回神奈川県総合教育会議を閉会します。本日は、ありがとうございました。

会議資料

資料 かながわ教育大綱における主な取組みについて

(参考資料) かながわ教育大綱